

松村未英 (ピアノ)

Mie Matsumura

「ゴイエスカス」の真実の姿をめざして

3歳からピアノを始め、イーストマン音楽学校などアメリカで学び、2004年からスペイン在住の松村未英は、昨年、スペインで最高峰のホール、マドリッド国立音楽堂で日本人として初めてリサイタルを行い好評を博すなど、活躍の場を広げている。スペイン音楽に力を入れるようになったのは、フラメンコ・フェスティバルのディレクターをしていたスペイン人の夫を通じて、本格的なフラメンコに触れることができ、リズム面などで音楽とのつながりに面白さを感じたからだという。

松村がファースト・アルバム・プログラムの選んだのは、画家ゴヤからインスピレーションを受けたグラナドスの組曲『ゴイエスカス』（ゴイエスカはゴヤ風という意味）。従来、組曲最後に演奏されることの多い〈わら人形〉を冒頭に置く新しい解釈が注目される。

「グラナドスは50分以上もかかる組曲『ゴイエスカス』を作曲後に、たった4分ほどの短い〈わら人形〉を加えました。組曲は愛の告白から始まります。当時は未婚の男女が2人きりで会うことは許されなかったの、恋に落ちた彼は一目会いたさに彼女の家に通いますが、後で死んでしまいます。その後幽霊となって彼女の元に戻り、2人は永遠の愛を誓う、というストーリーです。組曲の1曲目がいきなり愛の告白で始まるので、この2人がどこで出会ったかという場面をつけ足して、よりお話を完成させるために、グラナドスが〈わら人形〉という題の小曲を後で加えたのだ、と私は考えました」

〈わら人形〉自体の構造も、冒頭に置くのにふさわしいという。

「曲が序曲のスタイルになっていて、華やかな幕開けの雰囲気を作りだしています。オペラ『ゴイエスカス』でも〈わら人形〉を最初に置いて始まります。組曲の最後の曲〈幽霊のセレナータ〉は、エピローグ、となっていて、その後にさらに曲を置くのではエピローグになり

ません。また、グラナドス自身が『ゴイエスカス』を〈わら人形〉で弾き始めたという記録もあります。ここでいう“わら人形”とは、人形そのものではなく、日本でいう“かごめかごめ”のようなスペインに昔からある遊びで、女性たちが大きな布の端を持ちトランポリンのようにして、洋服を着せたわらの人形をぼーん、ぼーんと歌に合わせて跳ね上げるというものです。女性が人前で意見を言うことが出来ない時代に、こうすることで鬱憤を晴らすという側面もあり、今日でもスペインでは優柔不断な人を、『わら人形のように』と表現したりします。人生とは思いつ通りにいかず、人は運命に操られてしまうのだ、というメッセージもあるのではないのでしょうか。つまり、これを初めに置くことによって、続く長い物語の予兆になると解釈したのです」

全曲を通じて、ファンダンゴやホタといったスペイン独特のリズムがとても鮮明かつ繊細に表現されているのが印象的だ。

「『ゴイエスカス』では、それぞれの曲中で情景が動画のように鮮やかに描かれていきますが、スペイン音楽の一番の命はリズムだと思います。グラナドスは楽譜に大変細かにテンポ表示を記載しており、それらを忠実に反映するよう努めました。このリズムの取り方は、従来のどの録音とも違いますので、そのあたりも注目して聴いていただければと思っています」

この5月には『ゴイエスカス』を弾くコンサートも開催予定。フラメンコとスペイン音楽の出会いを描いた『セレナータ・アンダルーサ』も日本で取り上げたいという。取材・文:伊藤制子



【CD】グラナドス:『ゴイエスカス』
—ゴヤが靈感を与えた音楽—
松村未英(ピアノ)

グラナドス:①わら人形 ②「組曲ゴイエスカス—恋に落ちたふたり—」(愛の言葉・窓辺の語らい・炎のファンダンゴ・嘆き、またはマハと夜鳴きうぐいす・愛と死:バラード・エピローグ:幽霊のセレナータ)

コジマ録音

ALCD-9121 ¥2940 5月7日(月)発売

【Concert】

5月16日(水)・真駒内六花亭ホール店(011-581-6666)、26日(土)・北九州市立響ホール(093-562-3611) ●発売中